



‘スタートアップ企業’が 忘れてはならないこと

短期間でビジネスモデルを急成長させることを目標とする‘スタートアップ企業’が次から次へと登場し、それが中堅企業、大企業へと成長する過程で、韓国の産業は発展を遂げてきました。今では大企業となったSAMSUNGやLGなどもそのような過程をたどり、最近では韓国最大手のインターネット検索ポータルサイトである‘ネイバー’や、スマートフォン用の無料通話アプリケーションを提供する‘カカオトーク’などが韓国の産業発展に寄与しています。そして、これに続けとばかりに多くのスタートアップ企業が熾烈な戦いに挑んでいます。

そのような状況において、韓国のスタートアップ企業はどのような問題を抱えているのでしょうか。知り合いのスタートアップ企業の社長らに話を聞いてみたところ、まずは資金確保の問題が挙げられ、その他にも営業先の開拓、人材の確保、R&D（研究・開発）への努力などについて頭を悩ませているとの

ことでした。近年あったSAMSUNG対アップルの裁判以降、特許権の確保をより重要視するようになったせいも、特許を得るにはどうしたらいいのかという問い合わせも増えてきました。スタートアップ企業においてはどれも重要な悩みであり、解決しなければならない事案です。

しかし、このようなスタートアップ企業の社長らが非常に重要であるにもかかわらず、見逃している点があります。それは、同種技術分野に散在している先行特許の検索です。これを怠るとどのようなことが起こるのでしょうか。

あるスタートアップ企業の社長は1年以上を開発に費やした技術であると言いながら、特許出願の依頼に訪れましたが、1時間の検索で同一の先行特許が発見されました。1年間R&Dに投入した努力が相当な部分で水の泡になった瞬間でした。このような事例から分かるように、同種技術分野に散在する特許





を少しでも見つけ出して分析し、自分たちが研究開発するアイテムが既存にあるか否かを確認しなければなりません。そうすることでスタートアップ企業の限りある人材と資金を効率的に活用することができます。

このように同種技術分野の特許を可能な限り見つけ出そうとするスタートアップ企業は非常に珍しいようです。検索には膨大な時間がかかるから…と二の足を踏むようですが、次のような事例もあります。

例えば、あるスタートアップ企業の社長は、自分の技術はA+B+Cからなっており、全世界的に見たことがないと言いました。参考までに、A+Bは既存の技術であり、Cは改良された技術です。ところが、可能な限り多くの先行特許を見つけてこれを分析してみると、A+Bを権利範囲として有する源泉特許の存在が発見されました。つまり、A+Bを含むがCと一部類似しながら一部異なる面もあるC'、そしてC"のような要素が含まれた技術や、A+Bを含むがCと異なる方法で具現されたDのような要素が含まれた技術の存在があることも分かったのです。

これを通じて、スタートアップ企業は最初の聖地の位置（源泉特許の位置）を知ることができ、自分がそこからどれだけ離れた位置にいるかを予想することができますようになります。自分が進むべき方向としてCが正しい

のか、Dが正しいのか判断することもでき、Cが正しいと判断する場合はC'、C"などでビジネスを展開するライバル会社との比較を通じて、当該スタートアップ企業の長所と短所を判断した上で悩むことができます。結果的に同種技術分野の特許を可能な限り見つけ出す方法を通じて、スタートアップ企業が進むべき巨視的方向を把握することができるのです。

また、もう一つ先行特許を検索する上で大切なことは、米国特許は最大限見つけ出す必要があるということです。全世界で最も重要な技術はすべてアメリカに集まると言っても過言ではありません。つまり、米国特許についてだけでも詳細に調べることができれば、スタートアップ企業が進むべき巨視的方向をかなり正確に把握することができると言えるでしょう。

筆者紹介



柳鍾宇 (ユ ジョンウ)

GIP Korea代表弁理士。ソウル大学電気工学部を卒業。2009年弁理士登録。弁理士になる前は(株)LGディスプレイで設備購買及び技術営業の日本担当を務める。

前職の特許事務所では、最初は(株)サムスンの特許明細書作成/中間処理/外国出願などを行い、後に日本企業の韓国出願を担当。趣味はゴルフ。